

泥だんご作り

伊集院 理子

昨年度、四歳児の担任として一年間を過ごした。三歳児から進級児四十名を、クラス替えをして二つに分け、そこに新入園児三十名を加えるかたちで、クラス編成がなされた。

クラスの人数も大幅に増え、クラス替えもあったため、新学期は、新入園児だけではなく、進級児も、環境の変化に戸惑う姿がいたるところで見られた。担任の私も、連続して三歳児の担任を二年間務

めていただけに、久々の三十五名の子どもたちとの毎日は、その人数の多さに正直なところ圧倒されていた。

一学期前半は、「あせりは禁物」と肝に銘じ、子どもたち一人ひとりのペース、リズムを大事にしなから、新しい環境の中でそれぞれが自分の居場所を見つけられるように、そして自分からやりたいことを見つけ動き出すことができるように、まず個別の

対応を丁寧に積み重ねていくことを心がけてきた。それとともに、素材に触れその感触を楽しむ中で、からだどこの緊張を解きほぐし、それぞれが安心して素の自分を出せるようにと考え、保育室そばの園庭の片隅に、絵の具・水などに充分親しめる場などを作ってきた。それはまた、個々の子どものからだどこの緊張を解きほぐすためだけではなく、その「場」に集った子どもたちが、そこでそれぞれの取り組みをしながら、触れあい、関わりあいを広げていけるようにと意図したのもであった。

新しいクラスでの生活がどうにか軌道に乗り出してきた六月中旬、郊外の畑にじゃがいも掘りに出かけた。畑の土は、ふっくら柔らかく、おいもを掘りながら、子どもたちはその土の感触をおおいに楽しんでた。掘り終わった畑はじゃがいもの葉、茎が一掃され、こげ茶色に広がっていた。ふかふかした

畑を子どもたちは、元気に走り回り出した。そのうち年長児の何人かが、水道の周りの湿った土で、だんごを作り出した。畑の土は、柔らかく、気持ちよく纏まってまるいだんごができた。それを見て、年中のM児、Y児も、土でのだんご作りに初めて取り組んだ。

畑でのだんご作りの経験は、園に戻ってからも続いていった。次の日から、M児、Y児は、園庭の高台（「おやま」）の土で、だんご作りを始めた。じゃがいも掘りに出かける前から「おやま」では年長児が継続的にだんご作りに取り組んでおり、M児たちは、年長児のやるのを見よう見まねでやり始めた。登園すると、すぐに「おやま」に出かけ、午前中いっぱいかけてだんごをまるめて、真っ黒になって保育室に戻ってくる日々が何週間も続いた。M児たちが固いまるいだんごを作ってくるのに惹かれ、だんご作りの人数は少しずつ増えていった。

私は、M児たちがどのようにしてだんごを作っているのか、気になりながら、保育室での製作、絵の具・色水あそびなどに手をとられ、「おやま」までなかなか足を運ばずにいた。

七月に入って大分経ってから、時間を見つけ、私も初めて「おやま」での泥だんご作りに加わった。

この時、私は泥だんごについての予備知識をほとんど持ち合わせていなかった。経験者であるM児、Y児、年長児に教えを請いながら、それこそ見よう見まねで、必死になって作った。その日、子どもたちが降園した後も、初めて作っただんごに手を加え、細かい土や布で磨いて、かなりひかるところまでやり続けた。ある程度ひかせて見本として子どもたちに見せてあげようという意図を持ちながら始めたことであるが、やり始めたらずめられなくなっていくたというのが実情であった。

次の日の朝、子どもたちの目にとまるところに、

輝き始めただんごを置いておいた。子どもたちは、すぐにへひかるだんごに気づいた。「先生が昨日おやまで作っただんごを磨いたら、こんなにひかっただんだ」ということを伝えて、

「おやまにだんごを作りに行ってみない？」と誘うと、これまでのメンバー

に新参の子どもが加わり、かなりの人数がついてきた。

「おやま」では、年長、年中入り混じり、二〇名近くの子どもが集まり、だんごのもととなる濡れた土の周りにひしめき合いながら、だんごを作り始めた。ながらく経験をつんできているU児が、手のひらでうまく転がしながら、奇麗な丸いだんごを目の前で作っていく姿は、新参の子どもたちにも、「U児ができるのなら、自分たちにもできるにちがいない」という思いをもたらし、それぞれがだんご作り



に精を出していった。U児は、「もう少し、でこぼこをなくすまでやった方がいい」とか、「綺麗な固いまるになったら、さらさらの土を手につけて、手の上でくるくる回していると、ひかってくる」など、的確にコツをなかに伝授していた。

それから、一学期末まで、さらに長い夏休みを経て二学期が始まって寒さが厳しくなるまで、そしてだんだん寒さがゆるんできた三月に入ってから、このだんご作りはずっと続いていた。その過程で、自分たちの手のひらのサイズにあっただんごの大きさが定着してきて、あつという間に綺麗にまいるだんごを作りあげ、手のひらで磨いてひからせてしまう、U児を筆頭に、A子、S子、M子などなど、だんご作りの名人が何人も生まれていった。

子どもたちはどうしてここまで、このだんご作りにのめりこんでいったのだろうか。その要因として

考えられることは、からだで感じること、触感を扱うことが、この活動の中に充分含まれていたということがまずあげられる。

一般的に子どもたちはどろどろが大好きなものと考えられているが、泥水のにゆるにゆる感には抵抗を感じる子どもも多い。しかし、そのにゆるにゆる感に堪えて、少しずつ力を加えながら水分を絞り、根気よく手のひらで土の塊を転がしながら握っていると、そのにゆるにゆるがいつの間にかなくなり、手のなかにすつと収まるようになってくる。その感触の変化が、最初の抵抗感をしだいに気持ちよさに変えていったのだと考える。触覚的な気持ちよさがあるから、長い間ずっと握り続けて、そのうち気がついたら、手の中で、固いまんまるのだんごになっていたという感じだろうか。

泥だんごは、土という原初的な素材に対して、自分の手だけを使って作り出す、その子なりの究極の

表現といえるのではないだろうか。子どもたちは、よりよい自分、完璧なもの、完全のものを求めて子どもたちなりに日々精一杯生活している。その子どもたちの心の在りようをまるく固い泥だんごは象徴しているように思えた。「まる（球）」というのは、子どもたちにも手の届くもつともシンプルな完璧な形だといえる。その理想の形（より奇麗なまる、より美しいまる、より固いまる）を求めて子どもたちは自分たちの技術を磨いていった。技術を磨くといっても、技術がいつのまにか子どもたちのからだに身についていって、からだの一部になっていったという感じだろうか。

大人はいかに効率よく固いだんごを作るかというノウハウからどうしても入ってしまいがちであり、やりながらもノウハウが頭を離れない。それに比べ、子どもたちは、触覚的な気持ちよさに浸っているうちに、いつの間にか、コツをからだに染み付か

せていったという様子であった。

子どもたちが、この活動にのめりこんでいったもう一つの大きな要因は、一緒に取り組む年長児、教師、友だちの存在があったことが大きかったと考えらる。

「おやま」には、以前から泥だんご作りに取り組んでいる年長児がいて、そのやり方をモデルにしながら年中の子どもたちは見よう見まねで取り組んでいた。Y児が、かなりコツをつかみ、奇麗なまるいだんごを作って私に見せに来たとき、「Yくん、すごいじゃない！」と私が褒めると、「年長さんが、教えてくれたから、できたんだ」という、とても謙虚な発言がY児の口からすつと出てきた。

だんごを作っている子どもたちの様子が気になりながらも、かなりの間、私は「おやま」に行けないでいた。その期間は二週間以上あった。今、思い返

してみると、もし、私がつと早い段階でこの遊びに加わっていたら、このような展開にはならなかったのではないかと考える。子どもたちは、この期間年長さんをモデルに自分たちの力で、かなり技を磨いていた。その子どもたちだけの試行錯誤の時間がとても重要だったと思う。私がつと早い段階で紹介していたら、教師根性から「もつと〇〇したほうがいいんじゃない」とか、色々口を挟んでしまったり、手を出してしまったりしていたのではないかと思われる。また、この泥だんごの活動をみんなに広げたいという思いから、時期尚早に他の子どもたちに働きかけていたかもしれない。

泥だんご作りは、これまで述べてきたように、教師の働きかけなしに、M児、Y児から始まり、二人の作るだんごに惹かれ、草の根的にだんご作りに取り組む子ども的人数が増えていった。私に加わったときには、何人もの子どもたちが自分たちでコツ

をすでに身につけ出して、私は子どもたちに教えてもらうという形でだんご作りに取り組むことになった。はからずも、先行している子どもたちにもウハウをもたずに、まっさらな気持ちで先人の子どもたちの教え通りにやってみた。その過程で、子どもたちが感じているであろう感触、気持ちを私もまさに横並びに体験することとなった。やり出してみると、子どもたちのことなどそつちのけで、より固い、完璧な球を求めて自分自身が夢中になっていた。自分が初めて作っただんごをその日のうちにどうにかしてひからせたいという気持ちを抑えることができず、子どもたちの降園後、ある程度ひかるところまでやり続けた。クラスの多くの子どもをこの活動に駆り立てた大きなきっかけは、へひかるだんごを求めて、子どもたちと一緒にやって私も夢中になっていったことがやはり大きかったと思う。へひかるだんごを子どもたちに示したのも、その

時は自分のだんごをひからせたいという一心で突き進んでいたが、今から思えば、絶妙なタイミングだったのだと思う。子どもたちがやり始めたばかりの頃に、ひかるだんごを呈示してしまっていたら、ひからせることに気持ちや早らせてしまい、大本のまるいだんご作りがおざなりになってしまったように思われる。子どもたちなりに充分試行錯誤し、ある程度だんごを作る技を自分のものとしてきたところで、一歩先のモデルとなるへひかるだんごが示されたのが、子どもたちの意欲をさらに刺激することになっていったのだと思われる。

私の作ったへひかるだんごは子どもたちを惹きつけ、それから連日、泥だんご作りに取り組む多くの子どもたちとともに、私も大半の時間を「おやま」で過ごすようになっていた。

一学期最後の数日間、「おやま」は、そここの

濡れた土の周りにひしめき合うほどの子どもたちが集まり、大変なにぎわいとなった。その様子を年長のN子は、

「だんごまつりだね」と称した。「おやま」に行けば、一緒に取り組む友だちがたくさんいて、友だちと関わりながら思う存分自分のだんごを追求できるといふことが、さらに子どもたちをこの活動に駆り立てたのだと考える。ともに取り組む友だちの存在が、一人ひとりの取り組みを活性化していった。

泥だんご作りというのは、一見すると、よりよいものへの個人的技量の追求に重点がある遊びという印象を持つ。しかし、子どもたちと肩を並べて取り組んでみて、それぞれの追求ではあるが、そこには、同じ感触を味わって、同じものを追求している、確かな一体感というものが存在していた。原初的素材《土》に向かって、自分の感覚を総動員して



いく。その活動は、個人の内側に閉じていくのではなく、逆に周りに開かれていくことにつながっていった。

泥だんご作りの大家、加用文男は、「人間の皮膚感覚がベースになって、人間には周囲や他のもの」とけこんで一体化していく能力がある」（これがボクらの新・子ども遊び論だ）童心社二〇〇一）と語っている。まさに、子どもたちは、自分の皮膚感覚をベースにそれを研ぎ澄ませていくうちに、周りのなかまと一体化していったのだ。えもいわれぬ一体感に身を任せているうちに、友だちのちよつとしたしぐさ、息づかいなどに対する子どもたちの感度が高まっていった様子もひしひしと伝わってきた。子どもたちは、自分のことだけではなく、周りで取り組んでいる友だちの感覚をも自分のことのようにとらえられるようになっていった。

そうになると、子どもたちは、とても謙虚になって

いった。「Sちゃんは、だんご名人だね」と、私がSのことを褒めると、「AちゃんやUちゃんのほうが、もっともつと名人だよ」という言葉が返ってきた。

感覚の共有ということがベースにあつて、子どもたちは、泥だんご作りをたくさんのかまとともに楽しみながら、自分の技を極めつつ、友だちへの思い、気づきを広げていったのだ。

私が今年持っていた、いろいろな素材に触れ感觸を楽しむ中で、子どもたち同士の触れあい、関わりあいを広げていきたい、という保育の意図は、子どもたちの中から出てきた泥だんご作りの活動において、こちらの予想をはるかに超えて一番の実りをみることとなったわけである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）